

福岡県・二丈町に接し、佐賀県・唐津市に近接している七山村は、人口約3,100人の山村であり、総戸数640戸の内約7割が農家である。

近年、当村の役場近くに建てられている「鳴神ノ庄」という農産物直売所は、新鮮な野菜や手づくりの農産加工品を豊富に品揃えし、午前中には品物が概ねなくなるという盛況ぶりをみせ、福岡市内をはじめ多くのお客を呼び込んでいる。

私がヒアリングを行った直前にも、福岡県のある町からの視察があったとのことで、同様の施設づくりを考えている自治体の注目を集めている。

最近このような直売施設を構想あるいは建設している自治体が多く見受けられる。そこで、前々から当施設に興味があった私は七山村が成功している理由、設立の経緯、現在の運営状況などについて話をお聞きしたところ、現在に至るまでに地域の農業生産にかかると必然的な物語があったことに改めて感心した。

きっかけはミカン減反

当村は昭和50年当初まで、ミカン栽培などによって一世帯当たりの農業所得が県下で2番目であったが、昭和58年以降のミカン減反に伴い、いち早く季節野菜などの施設園芸に取り組み始めた。しかし、野菜づくりに切り替えたものの、生産者が野菜づくりに不慣れであったことから農協が引き受けない規格外の品が出てきたため、ドライブ客相手に国道323号沿いで直売し始めたのが、当施設づくりのまさにきっかけとなったものである。

その後昭和58年の村内産業祭開催の時に、300点の各家庭でつくった野菜加工品などを出品し、これを契機に当初は無人販売所(42㎡)だったものを、県の事業で建物を建設し運営を始めた。年々売上げも増えたが、無人であるため産品出荷者と売上の食い違いなどのトラブルも発生したということもあり、昭和61年12月に新農業構造改善事業で約233㎡増築し、さらに販売する人を置き、

現在に至っている。

現在は女性の常勤パート7名、男性の常勤者2名で運営に当たられている。

豊富な品揃えと立地条件が成功の秘訣か

ヒアリングを受けていただいた産業課の担当の方に、「私も趣味を兼ねて、色々このような直売所を訪れているが、その品数の多さと安さに驚かされました」ということを話したところ、「そうですね。品物が豊富でないと人は続けて集まりません。品数が少なくなってくるとお客さんもしり貧でしょう。この豊富な品数を揃えるのが大変なんです。だから他のところが成功するとは言えません。また、立地条件が、丁度大都市から1時間半と手ごろなのがいいのでしょうか。あまり都市に近いと近辺の商店と競合してしまいますからね」というようなことを話された。

この豊富な品揃えを支えているのが、農協、商工会、役場で組織している協議会であり、さらに農協の下部組織としての各生産部会である。直売所の責任者は安定した品揃えを行うため、一般の出荷者が揃えきれない分を農協と調整し、生産部会から出荷してもらうようなシステムを日常的に行っているということであった。



七山村の位置



七山村農産物直売所「鳴神ノ庄」

現在、出荷登録者は約350人で、1日平均の出荷者が200人ということだが、出荷者は村内に住む子供からお年寄りまで広範囲にわたっており、夏休みはかぶと虫などで小遣い稼ぎをしている子供もいるとのことであった。

農業全体に占める役割はどの程度か

現在、当村は野菜などの園芸栽培を中心に、農業者一世帯当たりの収入は県下で5番目まで盛り返したとのことで、約12億の生産高を上げている。

当直売所では、年々売上を伸ばし、平成4年度実績で約2億ということである。

次に一人当たりの平均売上げをみると、1日の平均出荷者が200人であることから、一人平均で約100万円となる。頑張っている高齢夫婦で年間約300万円の現金収入があるというケースもみられ、出荷者の工夫と頑張り次第では大きな収入源になることがわかる。

これからは競合の時代か

役場担当者の話しでは、売上高も品揃えと顧客増加の見通しなどからみて、今が限度ではないかと言われた。

確かに、前原市や二丈町などの各自治体と同じような施設をつくり始めており、競合してくることは事実であり、今後消費者も選択の幅が広がることになるであろう。

そこで、今後はやはり安さより（100円が150円になってもあまり関係ないのではないか）、如何に新鮮で安全な品物であるかの信頼関係をつくりだすことが勝負ではないかと思う。

七山村の今後のより一層の展開を注目するとともに、私も消費者の一人としてまた何度も当地を訪れたいと思っている。